



平成25年 秋季号

平成25年11月23日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会
学生会員向け会報

電話 099-285-8537



噴火が続く昭和火口（写真左）



目 次

変化している農学	富永 茂人	2
焼酎メーカーのウイスキー造りと当社が求める人材	谷口 健二	3

ビバ・キャンパスライフ

生物生産学科

作物生産学講座

「大学4年間の経験」	植物育種学研究室	学部4年	有馬 康平	4
------------	----------	------	-------	---

園芸生産学講座

「出会いに感謝」	蔬菜園芸学研究室	学部4年	五十川 茉理	4
----------	----------	------	--------	---

病虫害制御学講座

「大学生活はチャレンジ」	害虫学研究室	学部4年	橋口 太亮	5
--------------	--------	------	-------	---

家畜生産学講座

「夕焼けに向かうよどみない眼差し」	家畜育種学研究室	学部4年	中島 光海	5
-------------------	----------	------	-------	---

農業経営経済学講座

「GO TO 現地!」	農業経済学研究室	学部4年	中尾 優花	6
-------------	----------	------	-------	---

生物資源化学科

生命機能化学講座

「キャンパスライフ」	生分子機能学研究室	修士1年	野間友希子	7
------------	-----------	------	-------	---

食品機能化学講座

「大学生活を振り返って」	栄養生化学・飼料化学研究室	学部4年	野島 敏	7
--------------	---------------	------	------	---

食糧生産化学講座

「新しい出会いと繋がり」	植物栄養・肥料学研究室	学部4年	森下 清香	8
--------------	-------------	------	-------	---

焼酎学講座

「2010-2014」	醸造微生物学研究室	学部4年	迎 麻菜美	8
-------------	-----------	------	-------	---

生物環境学科

森林管理学講座

「大学生活での経験」	育林学研究室	修士1年	上野亜寿美	9
------------	--------	------	-------	---

環境システム学講座

「大学生活を振り返って」	食料環境システム学研究室	大学院1年	吉富 克彦	9
--------------	--------------	-------	-------	---

生産環境工学講座

「大学生活を振り返って」	農地工学研究室	学部4年	森 美沙子	10
--------------	---------	------	-------	----

獣医学科

基礎獣医学講座

「卒業論文を通して学んだこと」	行動生理・生態学教室	学部6年	戸田 克樹	10
-----------------	------------	------	-------	----

病態予防獣医学講座

「大学生活を振り返って」	動物微生物学研究室	学部6年	小出 智矢	11
--------------	-----------	------	-------	----

臨床獣医学講座

「今、思うこと」	伴侶動物内科学分野	学部6年	堂森 あすか	11
----------	-----------	------	--------	----

教育実習奮闘記	12
---------	----

インターンシップ体験記	13
-------------	----

介護体験記	15
-------	----

留学報告	15
------	----

編集後記	16
------	----



変化している農学

富永 茂人（農学部長）

学生諸君は、農学部についてどのようなイメージを持っているでしょうか？一頃は、食料生産が中心の‘重労働’、‘地味’など、3Kのイメージが強い時代もありましたが、最近はいぶふん変わってきているようです。農学部における学びは、食料生産やその加工などの従来の農学分野に加え、‘食’、‘生命’、‘環境’、‘バイオ’、‘エネルギー’など私たちの生活に密接に関わる領域まで広がってきています。特に、一昨年の東日本大震災以降は、農学は人間の心を潤す学問、生きていることが実感できるハートフルな分野という評価も高まっていると感じている人も多くなっているようです。また、社会的な‘食や健康’、‘長寿’、‘地球温暖化’など農学系学問領域への関心の高まりに加え、持続可能な生物の再生資源などの新分野も開拓されており、従来の農学よりも幅広い新しい学問としてのイメージが広がってきています。もちろん、農学部の教育・研究は、‘実学’として地域や外国の第一次産業とも密接に関連しています。例えば、鹿児島大学農学部でも、学生は附属農場や附属演習林においてフィールド実習を行うばかりでなく直接地域の農林業や地域経済について研究・学習したり、‘国際協力農業体験講座’などに参加して国際的・グローバルな視野を広げたりしています。一方、農学部は‘焼酎マイスターコース’や‘林業生産専門技術者養成プログラム’など、地域における人材養成にも貢献しています。

このように、実学として問題解決に向けて様々な視点やアプローチで取り組む応用力を養うことを目的としている農学教育の思考は、卒業後の就職先での評価も高く、農学系の学問領域の拡大とも相まって、就職先も幅広く、多種多様になっています。そのような中、全国的に農学部の志願者も増加しており（文科省学校基本調査）、農学部新設の動きも出てきています。

そのような志願者の増加は、特に女子の増加が特徴であり、入学者に占める女子の割合も増加し、多くの大学で女性の活躍が際立ってきているといわれています。鹿児島大学農学部では、入学者に対する女子の割合は、学部で44.8%（平成21～25年平均）、大学院修士課程で32.9%（平成23～25年平均）で、他大学と比較しても高い方であるものと思われます。

鹿児島大学では男女共同参画の取り組みの観点から、女性研究者の育成や支援に積極的に取り組んでいます。農学部では、鹿児島大学主催の「女子中学生のための鹿大科学体験塾」の一環として、今年も‘発酵食品がもつ隠れたパワー’と‘生命誕生の神秘’という2コースを開講しましたが、女子大学院生が補助指導者として活躍しています。また、女性研究者および女子大学院生に対する研究費や学会参加旅費の助成にも女子大学院生が採択されました。

以上、特に女子学生の活躍について触れましたが、男子学生も含め、鹿児島大学農学部の学生諸君には、農学の変化を実感し、これまでのフィールドワークを中心とした実学に加えて新しい農学を学び、その成果をしっかりと身につけて、積極的に社会に進出し、活躍されることを期待しています。

平成25年度学生向け講演会(要旨)



焼酎メーカーのウイスキー造りと当社が求める人材

本坊酒造株式会社 常務取締役 谷口健二

本坊酒造は、創業明治5年、142年の歴史を持つ老舗オーナー企業である。資本金は1億円、従業員約200名で鹿児島県内に4工場、宮崎、山梨、長野各県に1工場の計7工場と全国に5か所の支店がある。関連会社には薩摩酒造(株)、日本澱粉工業(株)、(株)南九州ファミリーマート等多数あるが、弊社が母体となって膨らんでいった本坊グループである。売上構成は焼酎類が80%以上を占めるが、ワイン、リキュール、ウイスキー類等、ビールと清酒以外はすべての酒類を製造販売している。

日本のウイスキーマーケットは、平成に入ってから20年間長いダウントレンドが続き最盛期の5分の1までシュリンクしたが、ハイボールブームもあって5年ほど前に底を打つとともに、ここ数年世界における日本のウイスキー評価は著しく上がっている。弊社のウイスキーも昨年IWSC（インターナショナル・ワイン・アンド・スピリッツ・コンペティション）で3アイテムが銀賞・最高得点を受賞、今年は唯一の世界的ウイスキーコンペであるWWA（ワールド・ウイスキー・アワード）のブレンディッドモルト部門で世界最高賞を受賞し、業界を驚かせた。自分が単身ロンドンでの授賞式に臨んだが、その緊張と感動は忘れられない。

そもそも、弊社のウイスキー造りは昭和24年の鹿児島工場における製造免許取得に始まる。昭和35年には山梨県石和にウイスキー・ワイン工場を新設し、本格的に原酒の製造を開始した。その際、プラント設計及び技術指導を行ったのが弊社のウイスキー造りに関するキーパーソンの岩井喜一郎である。氏は純粋アルコール製造技術を開発したことでも著名だが、日本で初めてウイスキー原酒を製造した竹鶴政孝の上司であり、大正7年にスコットランドウイスキー留学に送り出した人物である。弊社のプラントは、竹鶴が2年後帰国し岩井に提出した有名な「竹鶴レポート」を参考に設計された。岩井家と本坊家は姻戚関係にあり、日本のウイスキーの原点であるそのレポートもその後本坊家が保管していた。

昭和60年、ウイスキーの製造は信州中央アルプス駒ヶ岳山麓標高800mにある信州マルス蒸留所に移る。寒冷で、霧深く、軟水の地下水という理想的な環境である。発酵タンクや2基の蒸留機（ポットスティル）等プラントの一部は山梨から移設したもので、岩井の意思を引き継いでいる。一昨年2月に19年休止していた蒸留を再開し、今後岩井の精神を引き継ぎつつも、原料、糖化、発酵、蒸留、樽貯蔵すべての工程において様々なトライをし、フル稼働を行っていく予定である。鹿児島の焼酎を主力とするメーカーが製造し、世界に発信するウイスキーの今後には是非注目していただきたい。

現在、鹿児島大学院を今年卒業した新入社員が信州に赴任し、ウイスキー製造技術をアグレッシブに吸収している。彼は入社数年前からウイスキー造りへの思いや興味・憧れを直接強く訴えてきた。弊社が求める人材は、成績の優秀さや性格よりも、彼のように酒類（仕事）を愛し、楽しみ、その文化や品質を語ることに情熱を傾けられる人である。

今後の活躍が楽しみである。

ビバ・キャンパスライフ

生物生産学科

作物生産学講座

「大学4年間での経験」



植物育種学研究室
学部4年 有馬 康平

最近大学生になったばかりだと思っていたら、残り数カ月で卒業を迎える時期になりました。大学での4年間思い返してみれば楽しいこと、辛いことがたくさんありました。その一つ一つが貴重な経験や体験だったのではないかと感じています。

大学に合格してからの最初の経験はテレビの合格発表インタビューに答えるというものでした。鹿児島では珍しく雪が降る極寒の中テレビ中継が始まるまで30分も待たされ、アドリブで合格の喜びを伝えたことを強く覚えています。

バイトも様々な種類のものをしましたが、中でも変わったバイトが温泉の掃除と番台のバイトでした。毎日1時間だけ掃除を行い週一で番台を行うのですが掃除前に毎日無料で温泉に入ることができたり、お客さんとのんびり話をしたりするだけで、「こんなので給料をもらっていいのか？」と思うバイトでした。

また3年生の夏休みには東北の災害ボランティアに一般人として参加しました。なぜ一般人として参加したかという、自分の自論ではありますが、学校主催の学生だけで行くボランティアだとどうしても学生同士でふざけたり遊んだりしてしまい現地の方々に失礼だと考えたからです。そのおかげで現地では被災の状況をしっかりと目に焼き付けることができ、作業も心を入れて行うことができました。

そして4年生では10月に行われた育種学会で大勢の前で口頭発表を行いました。周りが院生や教授発表する中、学部生で発表することはかなりのプレッシャーを感じましたが無事に問題なく発表することができました。

しかし聞きのよい経験ばかりをしたわけではありま

せん。ギャンブルと名のつくものにはほとんど手を出し、夜中ずっとゲームをしたり酒を飲んだりして翌日学校をさぼるという腐った経験もありました。

私はこれらの経験を通して初めて知ることがたくさんありました。反省することもたくさんあります、でもそれは経験してみなくては見えてこないと思います。経験としては良いか悪いかはわかりませんが、しかし直にそれらを経験することで人間は成長できるはずだと思います。自分は大学生活4年間を通じて大きく成長できたのではないかと実感しています。

園芸生産学講座

「出会いに感謝」



蔬菜園芸学研究室
学部4年 五十川 茉理

4年間の大学生活を振り返って今思うことは、自分は多くの「出会い」に恵まれていたということです。鹿児島大学農学部に入學し、学科をはじめサークルやアルバイト先で自分にはない経験をしてきた人と交流する機会を得、新たな世界観が広がったと感じています。

特にサークルの仲間とは共に過ごす時間が長く、たわいのない話から将来の話まで幅広く、そして深く語り合えたように思えます。人数の多いサークルでしたので、様々な趣味やバックグラウンドを持つ人間がいて当然なのですが、その一人一人が個性的かつ魅力的でした。意見のぶつかり合いで、多少もめることもありましたが、皆がお互いを理解しようとする姿勢を持つ、心温かい人間でした。後輩も先輩も含め、彼らがいつも私のやる気や元気を奮い立たせてくれる源泉であったことを心から感謝しています。

また、たった2ヶ月間でしたが、オーストラリアのシドニーに滞在した経験も貴重な出会いの一つとなりました。シドニーで出会った様々な国籍の友人とは、英語を通じて互いの文化の違いや夢などを語り合う機会に恵まれ、日本国内では得難い貴重な体験を得ることができました。振り返れば半ば一人旅のような感覚で訪問したシドニーでしたが、再び海外で様々な人々とコミュニケーションを図りたいというチャレンジ精

神を掻き立ててくれましたし、自分と向き合うという意味でも価値のある有意義な時間であったと感じています。

4月からはいよいよ社会人となります。そして新たな「出会い」がたくさん待っていることと思います。大学在学時に会った最高の仲間を大切にしつつ、自分を高め他人を理解する、そして自分を理解してもらうための新しい「出会い」をこれからも大切にしていきたいと思っています。

病虫害制御学講座

「大学生活はチャレンジ」



害虫学研究室
学部4年 橋口 太亮

私にとって、大学で最初のチャレンジは、1年生のとき、学祭の実行委員として学祭の運営に携わったことです。私は、何か新しいことをやりたいという理由で、実行委員になりました。私は、多くのサークルの人たちと関わり、初対面の人と仕事を進めていく難しさを感じました。しかし、とても新鮮な毎日で楽しく、学祭を成功させるという目標に向かってチームで協力していく大切さを改めて学ぶことができました。

部活では、楽しい部にしようと幹部になりました。私は、初めてのまとめる立場で、価値観の違う部員同士の衝突などたくさんの苦しいことがありました。しかし、積極的に部員一人一人と交流を深め、先輩や同期、後輩と一緒に楽しい部活を作り出すことができました。厳しい壁にぶち当たっても、あきらめることなく乗り越えられた経験は、自分自身成長できました。

また、害虫学研究室は面白そうだと思って入りました。3年生のとき、ハスモンヨトウという害虫を統計の勉強のために大量飼育しました。しかし、飼育容器からの脱走や、共食いが起こり、うまくいきませんでした。そんなとき、先生方からの指導や、先輩方からのアドバイスや、同期と意見交換を行いました。私は、たくさんの人たちに支えられていることを改めて気づきました。また、卒論も厳しい問題にぶつかることもあります。研究で問題が起こる度に、一つ一つ原因を

分析し、結果に繋げていくことが大切だと学びました。

大学4年間で振り返り、失敗を恐れず、数ある選択肢の中で、やってみたいことはチャレンジすることが大切だと思いました。自分自身、いろんな価値観を持った人と出会い、学び、成長することが出来ました。また、失敗しても無駄なことはなく、そこから学び成長し、再び目標に向かって前進していけます。周囲の人たちに支えられていることに感謝し、これからも、全力で楽しんでチャレンジしていきたいです。

家畜生産学講座

「夕焼けに向かうよどみない眼差し」

家畜育種学研究室
学部4年 中島 光海

旅に出ると、日本で見る同じ太陽が、違う様で沈んでゆくから不思議だ。このあいだ見たミャンマーの夕焼けは格別だった。真っ赤な太陽が、赤いミャンマーの土を焦がしながら沈んでいく。灼熱の大地が昼間を終える瞬間、夜の冷気を含んだ風が人々の一日の汗を静かに冷やし、そっと癒してゆく。そんな美しい国と一緒に旅をした友人が、現地出会った人々の“掌”をビデオカメラに撮影していた。『掌には人の数だけ個性がある。それって、人の数だけ人生や生きる意味があるってことだ。』と彼は教えてくれた。

日本は、“豊か”だと言われるが、本当だろうか。日本のある子供たちは飢えることはないが、いじめで自殺する。日本のある大人たちは、残業を終え帰宅し、子供と一時間しか顔を合わせない。

ミャンマーは“貧しい”と言われるが、本当だろうか。ミャンマーのある子供たちは学校に行かず、自分で描いた拙い絵を1ドルで売っていた。着ている服も靴もボロボロだった。だが、赤い夕焼けに向かって立つ彼らは、少なくとも私より、“生きる力”に満ちていた。

ミャンマーで『お金持ち』と言われると、なんだかバカにされているようで腹が立った。でもきっとそれは、ミャンマーの人々も同じだろう。『貧しい』と言われてきっと腹が立つに違いない。それは“掌”のように、自分には自分の生きる意味があるからだ。ミャンマーの赤い大地を踏んで、彼らと同じように夕焼けに

(6) あらた同窓会学生向け会報

向かって立ちたいと思った。“今”を必死に生きている彼らの姿がまぶしかった。大学にバイトと忙しい日々の中で、毎日がなんとなく過ぎていた。きっとミャンマーの彼らのように、よどみない眼差しで夕焼けを見たことはなかった。

帰国して、自分が今ここにいる理由を考えてみた。そうしたら、その夕方にながめた夕焼けがミャンマーでの夕焼けのように真っ赤で美しいと思った。



農 業 経 営 経 済 学 講 座

「GO TO 現地!」

農業経済学研究室
学部4年 中尾 優花

学部3年生の夏、「国際協力農業体験講座」という集

中講義を受講し、ミャンマーへ渡航した。私は渡航前、「本当にミャンマーの人々は国際協力を必要としているのか」という疑問を抱いていた。実際に現地に行き、この目で見て、聞いて、触れて、感じて、初めて分かることがあるのではないかと思います、現地へ飛び立った。ミャンマーでの生活は、非常に充実したものだった。ここでは、国際協力について私なりに考えたことを執筆しようと思う。ミャンマーの人々の生活は私たち日本人から見ると、不便に思えた。電力供給が安定せず停電になることもしばしば、学校での勉強する環境が整っていない。農作業は手作業で行うため、なかなか作業は進まない。機械があれば一発で終わるのに、なんて思ってしまった。しかし、ミャンマーの人々は貧しさを感じさせないほど、暮らしの中に笑顔が溢れており、発展途上国の人々を客観的に見て、この国は貧しい、と決めつけることは失礼に値すると反省した。ミャンマーでの生活も、10日間ではあったが慣れてみると楽しいもので、国によって幸せの形は違うことを実感した。では、国際協力とは何なのか？ミャンマーでお世話になった方の言葉で国際協力の形が少し見えてきた。「国際協力とは、構えてするものではない。困っている人を助ける、自分の分かることを伝えることから始まる。」誰にだって国際協力はでき、それは一方通行ではないことだと考えた。しかし、正直なところ未だに国際協力に対する考えはまとまっておらず、生涯の宿題にしたい。

私自身、訪れたことのない場所へ行き、現地の人や文化と触れあうことは大きな収穫があった。自分の中での問題意識があるとき、机の上でひたすら考えるだけではなく、GO TO 現地!の精神を大切にしていきたいと思う。

最後に、ミャンマーでの生活や考えを振り返るきっかけとなったこのエッセイに感謝したい。



生物資源化学科

生命機能化学講座

「キャンパスライフ」



生分子機能学研究室
修士1年 野間友希子

大学院に入って、はや半年たちました。その中でも様々な経験を積むことが出来ました。

特に、7月に佐賀の放射光施設シンクロトロン(SLS)を訪れたことはよい経験となりました。シンクロトロンに行ったのは、0.2 mm ほどのタンパク質の結晶にX線をあてるためです。タンパク質の結晶は温度の変化で溶けてしまったり、振動で割れてしまうこともあるので、学校で丁寧に結晶の入った容器を梱包し、出来るだけ揺らさないように気遣って持っていくのにひと苦労しました。シンクロトロン施設の中に入ると、機械がむき出しでX線放射のときに動く機械を直接見ることが出来ました。こういった施設に入れることはあまりないので、中の機械を見れたり、実際に自分で作った結晶をシンクロトロンで解析できたことは大変興味深かったです。

また、9月には長崎の雲仙で開催された九州シンポジウムに参加することが出来ました。このシンポジウムでは、学生が先生とお酒を飲みながら研究のことを語ったり、ポスターセッションしたり、他の大学の学生と仲良くなるためにレクリエーションが開催されます。今回、私は初めての参加でした。相部屋では九大のドクター、M1と鹿大の理工学部のM2の方と一緒に、研究室ならではのお話や、今後の進路についてどんなふうに考えているのかお互いに共有できました。また、懇親会では社会人のドクターの方が実際にどういった仕事をしているのか具体的に説明してくださり、こういった機会があることは非常に大事だと感じました。今後も、横のつながりを広くして研究につなげていけたらいいなと思います。これからまだ時間もあるので、研究しているいろんな方とお話をしていきたいです。

食品機能化学講座

「大学生活を振り返って」



栄養生化学・飼料化学研究室
学部4年 野島 敏

鹿児島大学に入学して3年半が経ち、学生生活も残りわずかと思うと非常に感慨深くなります。私は地元広島を離れ鹿児島大学に入学しました。最初は人間関係がうまく築けるか不安を抱いていましたが、今では多くの友人に恵まれました。

私は中学高校で陸上をしており大学でも続けようと決め、入学と同時に陸上競技部に入部しました。週5日が練習で、最初の頃は講義も練習もついて行くことが精一杯でした。だんだんと講義と練習の両立に慣れ、部活の成績も伸び、陸上を楽しく感じるようになりました。特に2年、3年の春のインカレ入賞、そして3年の鹿児島県選手権での大学生初の表彰台は今でも鮮明に覚えています。3年後期から研究室に配属され、12月からは就職活動も始まり部活を休む日が多くなりました。陸上部の中で就職活動をしている人は少なく「こんな時にまで部活をしないといけないのか」と思い、部活の参加自体も辛く、私自身の気持ちが弱くなっていました。久々に部活に参加した時、部員の応援や励まし、目標に向かってがむしゃらに頑張っているみんなの姿のおかげで消えかけていた諦めない気持ちが蘇り、部活も就活ももっと頑張っていこうと心に決めました。しかしながら4年の春の最後のインカレの結果は、2種目出場でどちらも予選敗退という悔しい結果で終わり、現役を引退しました。その後は就職活動に本腰を入れ無事内定を頂き今に至ります。

こうして見ると私の大学生活は陸上競技で占められていました。結果が残せなくても陸上が好きだったからこそ、ここまで続けることができたと思っています。自分の好きなことに没頭するのも大学生活の一つだと思います。

卒業まで数ヶ月となり、来年の4月からは皆別々の道へと進みます。卒業して働き始めても大学生活で学んだ事を活かしていきたいです。また、ここまで育ててくれた両親、共に苦しみ、喜びを分かち合った友人達、今まで私を応援し支えてくださった方々に感謝し、

(8) あらた同窓会学生向け会報

今後は何かしらの形で恩返しをしていきたいです。

輩方がしてくれたことをつないでいこうと思います。

食糧生産化学講座

「新しい出会いと繋がり」



植物栄養・肥料学研究室
学部4年 森下 清香

私の大学生活は新しい出会いの連続でした。熊本出身のため、大学から1人暮らしであり、知り合いもほぼいない状況からのスタートでした。

最初の出会いは同じ学科の友達、それからサークル、授業、アルバイト…様々な場所で同級生だけでなく先輩や後輩、文系と理系、学部、学科、他大学や短大生などたくさんの境界線を越えた出会いをしました。その中で、サークルでは先輩・後輩との上下関係や、アルバイトでの社会勉強、授業では高校までにはない専門的な内容の勉強といったあらゆる分野の新しい経験や勉強も出来ました。

3年生以降からは、学科というくくりから講座、研究室とより小さなコミュニティになり、学科という大きなくくりではあまり接点を持てなかった人とも授業や実習を通して新しい繋がりを得ることもできました。

特にこういった経験や繋がりの大切さを実感したのは就職活動の時です。私は公務員志望であり3年生から公務員講座を受講していましたが、勉強量はとても多く投げだしそうになるときもありましたが、他の受講生や同じ研究室で一緒に受講している人達、支えてくれる先輩方のおかげで乗り越えることができたと思います。また、並行して企業の就職活動も行っていたので一緒に頑張っている同級生と励ましあうことで頑張ることもできました。また、公務員試験でも企業の就職活動でも志望動機や大学生活について書く事がほぼ必ずと言っていいほどあります。これらを書く時に大学生での出会いや経験がとても役立ち、また多くの人とのつながりがあるということはそれだけ頼る人がいるということにもなります。

今、私は公務員講座合格サポーターとして講座生の後輩が良い結果を残せるよう手伝いをしています。大学生活の様々な所で先輩方に支えてもらい、同級生に協力してもらいました。今度は自分が後輩のために先

焼酎学講座

「2010-2014」



醸造微生物学研究室
学部4年 迎 麻菜美

わたしは高校時代、生物を選択していないくせに、なぜか大学では醸造微生物を学ぼうと心に決めていました。志望校をどこにしようか考えていたとき、鹿児島大学には焼酎を学べる講座があることを知りました。なんだか面白そう。それだけの理由で栃木から鹿児島にやってきてしまいました。しかし、現実はそう甘くありませんでした。生物を選択していない上に化学が苦手なわたしは、お世辞でも成績優秀とは言えず、ほとんどの科目で可と不可の間を綱渡りしていました。このままでは焼酎学講座に入れないかもしれない。もし入れなかったらわたしはいったい何のために鹿児島まできたのだろう。そんなことを考えて悩んだ時期もありました。「悩む前に勉強しなさい。」当時の自分にそう言ってあげたいです。そんなわたしを不憫に思ったのか、運が味方したのか、わたしはなんとか焼酎学講座に滑り込むことができました。そして研究室配属が終わり、卒業論文の研究テーマが与えられたのが3年生の後期。何にも分かりませんでした。自分の研究のことも、他の研究室のメンバーの研究のことも。先輩が教えてくれても、わたしの頭の中は混乱するばかりでした。「大丈夫。だんだん分かるようになるから。」混乱するわたしに先輩がかけてくれた言葉です。その言葉通りだんだん分かるようになり、今ではわたしが先輩になってしまいました。時の流れというのは恐ろしいくらいに早いものだ実感しています。

能天気なわたしは栃木から鹿児島に出てきてから4年。振り返ってみると楽しいことばかりではなく、つらいことや大変なこともありました。鹿児島にきてよかったと思っています。鹿児島大学に行く決心した18歳の自分。よくぞ決心してくれた。どうもありがとう。そしてそんなわがママを快く許して送り出してくれた両親にも感謝しています。これからも鹿児島に来たからこそ出来た人との繋がりを大切にしていきたいです。

生物環境学科

森林管理学講座

「大学生活での経験」



育林学研究室
修士1年 上野 亜寿美

鹿児島大学に入学してから5年目。現在修士1年である。大学4年間で振り返ると、部活・実習・研究室生活が特に思い出される。

さまざまな勧誘を受けたが、音楽系サークルを選び大学4年の6月まで活動した。毎年6月に行われる定期演奏会を目標に練習する日々。その間には演奏旅行や合宿、学祭模擬店などたくさんの行事があり充実していた。しかし、専門講義がメインとなる大学2・3年の長期休暇は、泊まり込みの実習が多くサークルとの両立が難しくなっていた。もちろん学生の本分は学業であるため、単位を落とす・実習を欠席することはなかったが…。

研究室配属は大学3年の4月。研究室内でゼミ発表、イベント、調査などそれまでとは異なる生活が始まった。長期休暇を利用した海外の調査では、日本の森林との違いや限られた時間で効率良く動く方法、現地の文化など多くの経験と発見ができた。

大学4年、最後の定期演奏会は笑顔で楽しみたいとラストスパートをかけた。結果、「このメンバーでやってきて良かった！もっとこの場で演奏したい！」と引退まで続けた部員にのみ味わえる感動があった。この経験と仲間はずっと大切にしたい。一方学業では卒論研究。知識不足勉強不足で思うようにいかなかった。初めてのことが多かったが、何より自分で考えることが足りなかった。データ解析に関しては「共通教育で統計を習っておくべきだった」と激しく後悔。そんな中、学会で発表することが決まった。必要なデータを取ってくる、統計をきちんと学ぶ、それまでやってこなかったことを全部こなさなければならなかった。4年の後期は辛く苦しい時期だったがとりあえず学会も卒論発表会も無事に終え卒業。

大学院に進学した今、過去の失敗を繰り返さない・使いやすい研究室づくりなどの目標がある。私生活も

研究も就職も後悔のないようにしたい。研究室のみなさん、同級生、これからもよろしくお願いします。

環境システム学講座

「大学生活を振り返って」



食料環境システム学研究室
大学院1年 吉富 克彦

自分が今の派遣会社に入ったのは、大学3年の時だ。同じバイトを続けていたことがあったためかアルバイトをしようと考えた時に数日間で終わる派遣はいろいろな仕事を経験できるいい機会だと思ったからだ。実際に仕事は体力のいるものから接客まであり、初めて行く仕事は楽しみだった。派遣の仕事は1回限りの場合が多く、いきなり入ると戸惑うことがあるが、仕事の前はどうすればすぐに慣れることができるかを考えるようになった。最初は初めてだとできないことばかりでお店や訪れた客に申し訳ないと感じて仕事の後は反省をするようになり、後から派遣会社に報告、必要ときにはアドバイスを求めたり、意見を言えるようになった。

大学1年生の時からテニスサークルに入っている。3年生の時には副キャプテンに選ばれ、パーカーやTシャツのデザインから発注まで任されていた。サークルには今でも参加しており、テニスを通して後輩と交流をすることができている。後輩との会話は話が噛み合わずに話しかけるのを戸惑うが、少しずつ仲良くなっていくのは面白い。サークルの幹部をしていた時は活動の中心にいたことでその場にうまく溶け込むことができたが、引退後はサークルのメンバーの1人としてどう参加したら良いか考えた。サークルは自分にいろいろな経験をさせてくれた場所だと思っている。今でもサークルに参加できているのは、勧誘してくれた友達、面倒をみてくれた先輩や慕ってくれる後輩がいたからであり、大学で自分が成長できたことをとても感謝している。最後に、大学の4年間で振り返って、本当にあっという間だったと感じた。自由に何かをする時間がたくさんあった一方で、もっと時間を割いてやっておけばよかったと後悔することもあり、あと2年間の残り少ない時間で自分に必要なことが何か気づけるよ

うになりたい。

生産環境工学講座

「大学生活を振り返って」



農地工学研究室
学部4年 森 美沙子

大学に入学した頃は友達も居らず、楽しいキャンパスライフの夢は崩れ私の学生生活は孤独のまま終わるのかと思っていました。友人に誘われてサークルに入ってから毎日楽しく、サークルだけではなく学科やアルバイト先でも多くの友人や人生の先輩を持ち、私の学生生活はより充実したものへと変わっていきました。学生生活では辛い事や厳しいこともありました、楽しくて仕方がない事も多くありました。どんな時でも傍に居てくれたのは友人でした。この学生生活の中で得た友人たちは宝物で、今後の人生でも大切にしていきたいものの1つです。

今、私は生産環境工学コースで農業土木を学んでいます。大学に入学した当初は全く興味の無かった分野ですが、先生方の概論を聞く中で興味を持ち、このコース希望しました。最初は高校時代に学んでいなかった物理がわからず苦戦しましたが、先生方の丁寧な指導のお陰でなんとかやってくることが出来ました。就職先も地元でこの専門を生かした仕事をする事が決まりました。これからもずっとこの農業土木という分野を学んでいく事になると思います。全く予想していなかったもので、4年前の私に言っても信じてくれないと思いますし、人生何があるかわからないというのが私の本音です。

「箸が転んでもおかしい年頃」とはよく思春期の娘に使われる言葉ですが、全くその通りに、楽しい時には何があっても笑い転げる友人たちと今、卒業に向けて最後の研究を頑張っています。

これを読んでいる皆様も辛いこと厳しいこと多くあると思いますが、学生生活が充実した楽しいものとなるよう願っております。

獣医学科

基礎獣医学講座

「卒業論文を通して学んだこと」



行動生理・生態学教室
学部6年 戸田 克樹

鹿児島大学の学生となったのも5年前。気づけば卒業までの日数も少なくなっている。入学当初は念願の大学生になれた喜びを感じるとともに、卒業は6年先という遠い未来に少しだけネガティブな感情を抱いたことを思い出す。過ぎてみれば早いもので、卒業までの残り日数も数えられる程度しか残っていない。季節もあつという間に変わり、そよぐ風はときに身を震わせるほどになってしまった。

本年で学生生活を終える方の多くは卒業論文に関する実験やその作成に追われている時期であろう。私もそのひとりだ。この単位はなかなか手ごわく、卒業の前に大きな壁として立ちはだかる。実験作業に慣れない自分や度重なる失敗に落ち込み、ひとりで調査をする孤独さや結果をまとめる難しさ、相手に成果が伝わらないもどかしさ、さらには自身の能力の低さも痛感させられた。これまでの座学や実習とは異なり、長い時間をかけて結果を出すものでもあり、終わりも見えにくい。さらには精神的な苦労も多く、めげそうになったことは数知れない。世間がもつ大学生のふわふわしたイメージとは少し違う生活がそこにはある。しかしながら、得られるものが多いことも事実だ。卒論を進める過程で、関連するテーマで研究されている方たちや実験協力者の方たちと出会い、話す機会を多く手に入れることができた。その出会いのおかげで、これまで知らなかった世界をいくつものぞき見ることができた。人との出会いとそれにまつわる新たな世界との出会いの価値は言葉では表現できない。これらのことは、おそらく卒業論文を通してでしか経験できなかったことであろう。出会いだけでなく、これまでにない経験もたくさんさせてもらえた。このような貴重な機会を得られたことに感謝するとともに、これまでの自分を将来誰かに自信を持って話すことができるように、残りの学生生活も全力で送っていきたい。

病態予防獣医学講座

「大学生活を振り返って」



動物微生物学研究室
学部6年 小出 智矢

入学当初、大学生活6年間は長いと感じていたのですが、あっという間に時は過ぎ去り、残り半年を切ってしまいました。この大学生活のなかで最も印象に残っていることは、と振り返ってみたところ、真っ先に浮かんだものが屋久島でのヤクザル調査でした。

毎年、夏に屋久島で行われるこの調査は標高1000 m前後の原生林を含んだ地域を調査域とし、ヤクザルとそれを取り巻く環境や他の動物種の調査を目的としています。大学生活6年間のうち、延べ1ヶ月以上もの期間をこの調査に費やすこととなった魅力の一つは、一般社会での生活のように取り繕うことなく、まっさらな状態で屋久島の雄大な自然と真摯に向き合うことができることだと思います。原生林に朝日が差し込み、静かに流れゆく川面が煌めく様は大変神々しく、昔の人々はこういったものに神性を見いだしていたのだと感じさせました。その自然の中で社会生活を営むヤクザルは野性を感じさせつつもどこかヒトに似たところもあり、出会うたびに新たな驚きを感じさせてくれる存在でした。そして、もう一つの魅力はこの調査がなければ出会うことはなかったであろう多種多様な人たちの存在です。それまでは全く異なる道を歩いていた人たちが、ヤクザル調査という一つの目的の下に集まり、ガスも電気も通じていない、湧き水が飲み水といった日常からかけ離れた環境で9日間を共にする。その中での一つ一つの出会いや語らいが新たな視点や概念を私に与えてくれました。

大学という小さな世界では到底得ることは出来ない経験を積ませてくれたヤクザル調査およびそれに関わってきた多くの人たちに心より感謝いたします。就職するため今後は調査に参加できないことに一抹の寂しさを覚えますが、これからはヤクザル調査で得た多くのものを自らの中でさらに練り上げ、昇華させていくことに精進したいと思います。

臨床獣医学講座

「今、思うこと」



伴侶動物内科学分野
学部6年 堂森 あすか

入学当時は6年って長いなと思っていましたが、実際はあっという間に過ぎ去ってしまい卒業まで残りわずかになりました。この6年間の学生生活でたくさんの人と出会い、たくさんの思い出ができました。

入学当時はどんな人たちと6年間を過ごすのかという不安もありましたが、同学年のみんなは本当にいい人ばかりで、一緒に勉強したり遊びに行ったりして仲良く過ごすことができました。落ち込んでいるときは励まし、悩んでいるときは親身になって話を聞いてくれて、いろいろなことを乗り越えて今までやってこられたのはみんなの支えがあったからです。この学年で本当によかったと思います。

学生生活では、3年生までは時間に余裕がありサークル活動やアルバイトもしました。それらを通して幅広い年代の人と知り合い、社会勉強もできました。研究室に配属されてからは学校の授業や実習以外にも附属動物病院での診療の手伝いや動物当番、実験などで忙しくなりました。ずっと小動物臨床志望だった私にとって動物病院の診療に出られるのはとても興味深く、日々さまざまなことを学ぶことができました。時には大変なことやつらいこともありましたが、動物たちが元気になっていく姿を見ると私も頑張ることができました。素晴らしい先生方といい先輩、同輩、後輩に恵まれ、研究室での3年間は特に毎日が充実していました。

卒業後はまた新しい場所で新しいスタートをきらなければなりません。希望も不安もありますが、大学で学んだことを十分に活かし、一日でも早くいい獣医師になれるように努めたいです。最後になりましたが、6年間お世話になった先生方、先輩、後輩、そして同学年のみなさん、本当にありがとうございました。

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習を通して」

生物環境学科 生産環境工学講座
農地工学研究室

学部4年 奥村 浩樹

私は今年の6月に高校理科免許を取得するため、母校で物理の教育実習を2週間行いました。高校卒業後も何度か訪ねていましたが、今回は実習生としての訪問でしたので、少し複雑でした。高校生活を送った見慣れた校舎でも、先生という立場では、学生の時とは違ったものを感じました。教わるだけではなく、教える立場。生徒がより良く学生生活を送れるよう日々の業務を行っている先生方の姿を見て、何か一つでも吸収しようと実習に取り組みました。

実習期間中はどのように生徒たちと関わるか、どうしたらもっと分かりやすく授業を行えるかを毎日考えていました。授業や補習が終わるたびに、指導教員と今の授業のどこが良いか、何か感じたことはないか、生徒たちの反応はどうだったかなどを話し合いました。

初めての教壇実習に立った時の緊張はとても強烈で、今でも覚えています。しかし、その緊張も場数を踏むに連れて和らいでいきました。また、日が経つと休み時間や放課後には生徒たちが質問を持って来るようになりました。解説をしていると、ある先生から「実習生に質問してくるのは珍しい」と言われ、生徒から頼りにされているのを実感し、嬉しく思いました。そうしているうちにあっという間に実習最終日になり、締めくくりとして研究授業がありましたが、思うように進まず、反省会では悔し涙を流しました。

実習の中で、色々なことを学び、体験し、反省しました。その上で自分がまだまだ未熟であることも痛感しました。しかし、何より一番印象に残るのは生徒たちの楽しそうな表情です。ある先生はそれだけで全てが報われると言いました。私もこの実習で先生の醍醐味を知り、教職に大きな魅力を感じました。

この教育実習は私にとってかけがえのない宝です。



「2週間の教育実習を終えて」

生物資源科学科 生命機能化学講座
応用分子微生物学研究室

学部4年 黒木未知瑠

教育実習の2週間では教師としての資質や技術を学ぶことはもちろん、生徒や先生方、実習生との関わりの中で自分を見つめなおす機会を沢山与えられ、日々成長を感じることで非常に充実した毎日だった。初めて教壇に立ったときの緊張感、初めて「先生」と呼ばれたときの表し難い高揚感を今でも鮮明に思い出すことができる。気合を入れて臨んだ初めての授業は全然だめで、伝えたいことが全く生徒に伝わっていないように感じ、申し訳ない気持ちと悔しい気持ちでいっぱいだった。何度も授業構成を考え、実習生同士で模擬授業を行い、授業回数をこなすにつれ、ほんの少しずつだが生徒の見方や理解に沿った授業の工夫ができるようになり、「先生、わかったー!」と言って生徒が笑顔で報告してくてくれた時は本当に嬉しかった。また、拙い授業しかできていなかったはずの私を先生として迎え入れ、授業に積極的に参加してくれ、慕ってくれた生徒たちには感謝の気持ちでいっぱい、実習中は何よりの励みになった。指導担当の先生にはお忙しい中熱心に指導して頂き、教師としてだけでなく、社会人としての責任や在り方を教えていただいた。また、同じ教育実習生として助け合ってきた仲間達は、互いを高めあえる存在で、非常によい刺激と意欲を与えてくれた。教育実習では教師としての自覚や技術を学ぶだけでなく、人と人との信頼関係や、いかに自分が周囲の人たちに支えられているか改めて感じることもできた。逃げ出したくなるくらい辛いときもあったが、それ以上に普段の生活では得ることのできない貴重な経験ができたと思う。この教育実習の経験と反省を、今後に生かしていきたいと思う。



「教育実習を終えて」

生物生産学科 農業経営経済学講座
農業市場学研究室

学部4年 坂口由希子

5月20日から2週間、母校で教育実習を行いました。実習教科は生物、HR（ホームルーム）は3年生のクラスになりました。4年前まで通っていた学校で

先生として過ごすことに、最初はとても緊張していました。しかし生徒たちと部活や学校の話をしていくうちに、だんだんと緊張が和らいでいきました。HRが3年生ということもあり大学受験や大学生活の内容を中心にSHR（ショートホームルーム）では話しましたが、生徒たちが学習の記録で質問をしてくれたり廊下で声をかけてくれるようになり、先生として過ごすことに少し慣れることができました。

実習が始まるとすぐに朝のSHRを担当することになり、指導教諭の先生から声を大きくすることや生徒をしっかりと見て話すことを指摘されました。自分ではしているつもりでしたが、実際の現場ではまだまだ通じないと実感しました。授業計画や板書計画も何度も練り直して、どういう説明を行えば生徒が理解しやすいかを何度も考えました。私は実験を行ったのですが、そのための準備や先生のみで行う予備実験等しなければならないことがたくさんありました。それに加えて生徒の様子を毎日確認して気になる子には声を掛けたりと、常に目を配ることも忘れないようにも教えてもらいました。自分が高校生の頃は特に気にしていないことでしたが、先生方がどれだけ大変であったか感じることができました。

高校生だった頃には経験したことがない職員朝礼や教科会等にも参加し、授業見学をして指導案を練ったりして、あっという間に2週間が過ぎました。授業の際は指導教諭の先生が気をつける点を書いた紙を渡してくれて落ち着くことができ、無事に終えることができました。最終日に受け取った生徒からのメッセージを読みながら実習の2週間を振り返るとまだまだ反省することがたくさんありましたが、改めて教師になりたいと思える2週間でした。

インターンシップ

「インターンシップに参加して」

生物生産学科 作物生産学講座
作物学研究室（付属農場）

学部3年 新小田あづさ

私は鹿児島県アジア・太平洋農村研修（KAPIC）センターでインターンシップをさせていただきました。

元々、国際協力や国際交流に興味があり、関連する講義や学外での国際ボランティアなどにも積極的に参加してきました。この分野でさらに知識と経験を深めたいと思っていたところ、インターンシップを受講することになり、一番目に留まったのが国際協力・交流を実施し、コーディネートするこのKAPICでした。また職員の方全員が青年海外協力隊経験者ということも、お話を聞く良い機会になるのではないかと考え志願しました。

KAPICセンターの設立目的は主に国際協力・交流であり、真の意味はそれらを手段とした地域の活性化を図るものであると知りました。農村地帯に建てられた本当の意味を知り、今回の研修を通じて地域おこしにも携わることを嬉しく思い、また同時にインターンシップの意義を改めて考えることができました。

私の滞在中には海外研修生が3名来ており、私は主にその研修生の日本語の読み書き、漢字、カタカナなどの指導を任されました。3人の共通語が英語であったことに苦戦しましたが、日本とは違う環境で育った彼らの話はとても新鮮で、他国の文化を知ると同時に普段はなかなか意識しない日本の文化についても客観的に見ることができました。研修生と共に過ごし、最後には冗談を言い合えるほど会話できるようになりました。英会話につまずくと「Practice!」と言って笑いながら励ましてくれたり、夜には一緒にビリヤードをしたり、国境を越えて笑いを共有できた時の喜びは本当に大きいものでした。

今回の研修では農学という専門分野からは離れていましたが、改めて英語の必要性を感じながらこの職種の仕事を理解することができました。また、お互いの国の情報交換や高め合いといった濃い交流ができました。今回学んだことを活かし、今後の大学生活に精進していこうと思います。最後に、お忙しい中時間を割いて丁寧にご指導くださったKAPICセンターの職員の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



写真左が本人



「インターシップを終えて」

生物環境学科地域資源環境学講座
木質資源利用学研究室

学部3年 檜山 健人

私は8月19日から23日までの5日間、鹿児島県工業技術センターでインターシップを行いました。当センターでは庶務部、企画支援部、食品・化学部、生産技術部、地域資源部に分かれおり、私は木材の利用法について大学で専門としているため地域資源部でお世話になりました。

この期間、木材チップのかさ密度測定試験をはじめ、チャンチンモドキの衝撃試験とせん断圧縮試験など大学では体験することのできない機器に触れることができた大変良い経験になりました。そして、さらに木材の利用法や加工に興味を持つことができました。この期間、工業技術センターと建築、製材等の中小企業との協議会が開催されたため認証かごしま材生産工場連絡協議会に参加することができました。そこで、センターと企業、企業と消費者の連携性を感じることができ仕事をする上で相互に信頼し続けることが仕事を効率的に進めために重要だと感じました。

今回のインターシップでは職業体験というよりも、木材の今後の在り方や乾燥方法など知識を学ぶという場面が多く、まだまだ知識不足だと感じました。また、このインターシップで当センターのような仕事もあることを知り、自分がどのような職に就きたいかを明確にすると共にこれから始まる就職活動に挑みたいと思います。最後になりますが、インターシップを実施させてもらった鹿児島県工業技術センターの方々に感謝を申し上げたいと思います。



「インターンシップ体験記」

生物資源化学科食糧生産化学講座
土壌科学研究室

学部3年 寺園 楓雅

私は夏休みの8月26日から30日までの5日間、鹿児島県環境保健センターの食品薬事部でインターンシップを体験させていただきました。私が大学で学んでいる分野の研究職や公務員の現状というものがどのようなものなのか興味を持ったため、参加させていただきました。

研修では、自分たちの飲んでいる飲料水の残留塩素やスーパーで売っているサバやアジの水銀含量、食品中の残留農薬検査などを行いました。実際に食品添加物の検査では高速液体クロマトグラフの機械を使った

り、残留塩素の検査ではガスクロマトグラフィーを用いてMSで分子構造情報などを求めたりしました。大学の実験で使用したことのある機材や分析の方法が実際に職場で使われていることに感動し、今大学で行っている勉学にやりがいを感じることができました。国で決められた検査方法に沿って、丁寧に素早く検査を行っている職員さんの姿はかっよく、自分の身近にある水や食品の安全性がしっかりと確かめられていることを知ることができました。職場の雰囲気はとても暖かく、職員の方々との交流もとても楽しくさせていただきました。実験の途中にはこれからの就職活動についての話しはもちろん、社会人の生活や公務員の話、学生時代の思い出など多くのことをお聞きすることができました。「自分のやりたいことを仕事にすることができ、やりがいや幸せを感じられる」というお言葉は、本当に大切なことだと感じました。

5日間という短い期間のインターンシップでしたが、多くのことを体験し知ることができました。これから就職活動が本格的に始まります。今回の体験を生かし、自分がやりがいを感じることでできる職業につけるよう頑張っていきたいです。最後に、今回インターンシップという機会を与えてくださった方々や、お世話になった職員の皆さんに感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

「行政体験研修を通じて」

農学部獣医学科

学部5年 遠矢 翔太

私は今年の夏、インターンシップで広島県の行政体験研修に参加させていただきました。インターンシップに参加した目的は、行政において獣医師がどのような役割を担い、どのように働いているかを直に見て、感じることでした。

実際に同行・体験させていただいた業務としては、鳥インフルエンザのモニター調査・種雄牛の候補牛の調査・水田放牧農家への指導・病勢鑑定業務といったものでした。農家や農場に入る際には、しっかりと消毒を行い、防塵服を着用するといったことを徹底していました。また、動物だけを診るのではなく畜主さんともしっかりと話をし、時には資料も交えながら細かい指導をしていました。

また、病勢鑑定の業務体験では日頃行っている検査の一部を実際に器具などを使い説明していただきました。県全域から多くのサンプルが送られてくる現場であり、より専門的な知識が必要だということで研修制度も充実しているとのことでした。

行政に携わる獣医師として知識はもちろんです。また、農家の方々と対話をし、指導をするという業務においては人対人のコミュニケーションが非常に重要になってくるのだと強く感じました。

今回のインターンシップを通じて多くのことを経験することができました。そして、多くのことを考える大変貴重な機会になりました。私自身がこれから先、獣医師としてどのような道を進むべきかを真剣に考えなければならないと強く感じるようにもなりました。

行政における獣医師の役割は想像していたものより多くのことがありました。現場で診る動物の健康を考えと共に、その先につながる人々・動物に携わる人々の健康・幸せといったものも考えながら業務にあたらなければならないと感じました。

最後になりましたが、今回このような貴重な体験をさせていただいた広島県職員の皆様、中央畜産会の皆様に篤くお礼を申し上げます。ありがとうございました。



介護体験記



「介護体験記」

生物環境学科環境システム学講座
農業環境システム学研究室

学部4年 上田 耕太

私は平成25年の9月に、鹿児島市内にある高齢者デイサービスセンターにおいて、5日間の介護等体験に参加させていただきました。

体験内容は主に利用者の方々との交流と介助のお手伝いでした。私はこの春に4週間、出身校での教育実習を終えていたということもあり、当初、5日間なんてあっという間だろうと考えていました。ですが、そ

んな私を待っていたのは、感動と苦悩に満ちた非常に濃密な5日間でした。

体験初日の午前中、私は入浴介助ということで、利用者の方がデイサービスセンター内のお風呂に入られる際の介助を体験させていただきました。来たばかりで何もわからず、右往左往していた私でしたが、職員の方が一つ一つ丁寧に教えてくださり、なんとか無事に行うことが出来ました。浴場では、洗髪などの介助をしながら、利用者の方が転倒しないよう注意をはらったり、お湯の温度に気をつけたりと常に神経を集中しておかなければならず、全員の方の入浴が終わったころには、私は疲労困憊で汗だくになっていました。お風呂に入りたかったです。入浴介助が終わった後は、リハビリやレクリエーションのお手伝いをしながら、利用者の方々と話をしたりして交流させていただきました。ですが私は初日ということもあってか、緊張してしまいあまり多く話すことができず、そうこうしているうちにその日の体験は終了してしまいました。とても悔しかったです。

2日目以降は、徐々にですが緊張もほぐれ、周りのことにも少しずつですが目が向くようになりました。私は鹿児島島出身ではなく、鹿児島島の方言には疎かったために利用者の方とスムーズな会話をするのはなかなか難しかったのですが、積極的に話しかけることで段々と打ち解けていくことが出来ました。

実習を通して、介護の現場や社会福祉の現状についてその一端に触れることが出来ました。この経験を次のステージでも生かしていきたいと思います。

留学報告



「留学体験記」

生物資源化学科 生命機能化学講座
応用糖質研究室

学部3年 金原 咲希

私は去年1年間休学をし、ワーキングホリデーでカナダに行きました。大学に入学した当初は、自分自身が在学中に留学に行くなんて全く考えていませんでした。ましてや英語も苦手で、海外に行ったこともなく、留学＝文系というイメージを持っていたので、理系の私は興味もありませんでした。しかし、その気持ちが変わり始めたのは大学2年生の夏ごろからでした。サークルの先輩2人がオーストラリアに留学し、写真を見せてもらったり、経験を聞いたことにより私の心の中

で、海外も楽しそうだなという気持ちが湧いてきました。しかし、大学を休学して、一人で海外に行くということに不安があり、なかなか踏み出せずにいた私の背中を家族や友達が押してくれ留学を決心しました。カナダに行った当初はホストファミリーや語学学校の先生の話の全く聞き取ることができず、自信を失うこともありましたが、カナダでの生活は私にとって全く経験したことのない初めてのことばかりで新鮮でもありました。様々な国の人と友達になり、その国の文化や歴史、習慣、考え方を聞き、実際に感じることで視野を広げることもできました。また、外国では日本特

有の雰囲気を感じ取り、曖昧な表現で答えるということではできません。自分の意見や気持ちを実際に言葉に出さないと相手に伝わらず、コミュニケーションが取れないという環境で過ごしたことにより、自分の言葉で自分の意見をいうことの大切さも学びました。カナダで経験した多くの楽しいことも辛いことも留学に行かないと経験できず、自分を成長させることができなかったと思うので、本当に行って良かったです。この経験を活かして残りの大学生活を送っていこうと思います。

編 集 後 記

大学農場に勤務して、通算で26年が過ぎようとしています。「自分が出来ないことを学生に教えることは出来ない」というモットーで、これまで、多くの作物類を自分で栽培してきました。そのため、データを分析する科学者の端くれとしては、不適切かもしれませんが、日々の気候や作物生長の変化を肌で感じるという感覚頼りの癖が付いています。しかし、この話を学生にしても、あまりピンと来ないようです。自分がいる場所は携帯ですぐわかりますし、道案内もしてくれます。授業などでわからないことがあれば、画面を数回触るだけで解決します。さらに評価などのいろいろな物事も数値化されて出てきます。

数値はもちろん大切ですが、自然の状況を目で見て、感じて、そして把握することも、農業では非常に重要です。この感性をどのように学生に伝え、教えていくか、日々悩みながら、同窓会報の編集に携わっています。これからも、より良い会報にしていくため、皆様のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

(文責 附属農場 遠城道雄)

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24
TEL・FAX 099(285)8537
e-mail(arataakai@mc2.seikyoe.ne.jp)
振替口座 02010-2-876
事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所 中央印刷株式会社
住所 鹿児島市春日町12-16
TEL 099-247-3300
FAX 099-248-0164
E-mail p-chuou@awg.bbq.jp



高隈演習林での学生実習風景



桜島での学生実習風景